令和５年度

大阪大学
人文学研究科・文学部　インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学　人文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532　大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和６年９月

目次

はじめに .....教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科准教授）　平光文乃　1

1　演劇関係

1.0　兵庫県立尼崎青少年創造劇場研修概要

.....大阪大学中之島芸術センター特任教授　永田靖　2

1.1　「演劇学演習（劇場制作研修）インターンシップレポート

.....人文学研究科　博士前期課程１年　朝原広基　3

2　音楽関係

2.0　音楽関係インターンシップ概要.....人文学研究科教授　伊東信宏　11

2.1　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール　インターンシップ報告

.....文学部３年　久米羽奏・藤井花鈴・三木のどか　12

2.2　京都コンサートホール　インターンシップ報告

.....人文学研究科　博士前期課程１年　村田クレイグ・上原智子・張子葳　17

3　美術史関係

3.0　美術史関係インターンシップ概要.....人文学研究科教授　岡田裕成　24

3.1　大阪市立東洋陶磁美術館　インターンシップ報告 .....文学部４年　宮﨑慎一郎　25

3.2　京都国立近代美術館　インターンシップ報告

.....人文学研究科　博士前期課程１年　一宮文香　26

3.3　国立国際美術館　インターンシップ報告

.....人文学研究科　博士前期課程２年　平阪由貴　27

はじめに

本報告書は、令和 5（2023）年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロ劇場〉（演劇学）	学部生 3 名 大学院生 1 名
○あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール（音楽学）	学部生 3 名
○京都コンサートホール（音楽学）	大学院生 3 名
○大阪市立東洋陶磁美術館（美術史学）	学部生 2 名
○京都国立近代美術館（美術史学）	大学院生 1 名
○国立国際美術館（美術史学）	大学院生 1 名
○Amame Associate Japan 株式会社（美術史学）	学部生 1 名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導してくださった受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは平成 18 年度である。平成 18 年度～令和 5 年度の 17 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は 26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。

参考のために、平成 20 年度～令和 5 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	計
音楽	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	0	6	1	2	7	6	62
演劇	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	0	3	0	5	3	4	48
美術	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	2	1	3	3	0	5	23
映画	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
小計	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	2	10	4	10	10	15	139

＊単位修得を目的とせずに、インターンシップに参加した学生の数を含む

教育支援室インターンシップ専門委員（人文学研究科准教授）平光　文乃

1　演劇関係

1.0 演劇学関係インターンシップ概要

大阪大学中之島芸術センター特任教授　永田靖

演劇学研究室では、「劇場制作演習」として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2023年度は、兵庫県立ピッコロ劇団第77回公演「スターマン」（岩松了作・演出）を題材に、10月4日から10月7日にかけて実施した。

事前のオリエンテーションを９月下旬に行った。授業担当教員（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説した。同時に今回の研修についての必要な姿勢と考え方について述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを説明した。

授業の狙いは、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することである。また演劇上演の現場に触れながら、どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか、作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか、ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか、そして観客は作品をどのように受け取っていたかなどについて現場の体験を通して学ぶことにある。

このことを通して、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことが目的である。10月３日の演劇学の授業「観劇実習」において、今回の上演作品である「スターマン」についての作品分析を行った。ここで研修生以外の学生はこの演習を受けて作品理解を深め、10月７日の上演を観劇した。研修受講生は、これら事前の学習を経た後に観劇した観客の反応も併せて知ることができる。

研修受講生は、10月４日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。仕事の内容は、いわゆる「表方」、制作面での仕事である。広報、観客席廻り、ゲネの手伝い、観客受入準備とその対応、上演後の片付けなど様々であるが、併設するピッコロ演劇学校の授業参観やスタッフのレクチャーも受ける。その後、10月７日の上演には場内整理として客入れを担当する。それらを通して演劇公演という「出来事性」についてその一回性、反復性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、受講生は報告書を提出する。授業担当教員（永田）はそれらによって成績評価を行い、報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらう。

1.1　「演劇学演習（劇場制作研修）」インターンレポート

人文学研究科 芸術学専攻　演劇学専門分野　博士前期課程 1 年　朝原 広基

今回、筆者は 2023 年 10 月 4 日～7 日の 4 日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（通称：ピッコロシアター。以下、通称で記載する）での劇場制作インターンに参加させていただいた。以下はそのレポートである。

【インターン期間】
2023 年 10 月 4 日(水)～7 日(土)　全 4 日間

【インターン先】
兵庫県立尼崎青少年創造劇場（通称：ピッコロシアター）
　所在地：兵庫県尼崎市南塚口町 3-17-8

【インターン先概要】
「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚を図るため」[1]に、1978 年（昭和 53 年）8 月 19 日に開館した兵庫県立の劇場である。

［施設・設備］
大ホール（396 席、ピットを使用する場合は 288 席）
中ホール（定員 200 名）
小ホール（定員 100 名）
ほか楽屋・練習室・資料室（舞台芸術に関する書籍や上演台本・資料等を収蔵）
喫茶室ピッコロ（2023 年 7 月以降休業中）

［受賞歴］
1988 年 6 月　第 10 回サントリー地域文化賞
　受賞理由：演劇を中心とした文化創造の地域における拠点づくり
1991 年 5 月　第 45 回神戸新聞奨励賞
2005 年 1 月　JAFRA アワード（総務大臣賞）
　受賞理由：県立劇団（演劇学校・舞台技術学校含む）の長年の活動
2019 年 7 月　ひょうごユニバーサル社会づくり賞団体部門

[1] 兵庫県「兵庫県立尼崎青少年創造劇場の設置及び管理に関する条例」第 1 条、1978 年（昭和 53 年）3 月 25 日制定、最終改訂 2019 年（平成 31 年）3 月 19 日。

受賞理由：舞台芸術における障害者への鑑賞サポート

2022 年 12 月　日本アートマネジメント学会賞

受賞理由：一連の社会包摂事業（特別支援学校と劇団員が一体となって行ったオリジナル公演。地域社会になじめない外国人に対するコミュニティ参加支援。舞台を見聞きできない視覚・聴覚障害者への鑑賞サポート）

【インターンの流れ】

〇初日　10 月 4 日(水)14:30～21:30

初日、ピッコロシアターを訪れると、同館広報交流専門員の古川千可子氏および劇団部主任の新倉奈々子氏にお出迎えいただき、全体のオリエンテーションが行われた。古川・新倉両氏と参加者（筆者含め計 5 名）が自己紹介をし、全体の流れの説明を受けた。

オリエンテーション修了後、ピッコロシアター館長の林隆之氏よりピッコロシアターの役割についてのレクチャーをいただいた。ピッコロシアターは、「劇場」、その劇場を本拠とする兵庫県立ピッコロ劇団という「劇団」、ピッコロ演劇学校およびピッコロ舞台技術学校という「学校」の 3 者が揃う強みを生かして、「創造発信」「交流連携」「人材育成」「地域創成」という 4 つの社会的役割を果たし、これらの活動を通じて「地域が芸術でつながり、誰もが生きやすい社会をつくる」目的に対して活動中であること、そして、ピッコロシアターで働く人々は、運営母体である兵庫県の公務員と、運営委託を受けている公益財団法人兵庫県芸術文化協会の職員、そして舞台美術・音響・照明といった技術的な面を中心に担当する専門業者の従業員という、所属の異なる三者が入り混じって構成されていることなどが説明された。

その後、休憩を挟み、新倉氏の指導のもと、大ホールで行われた兵庫県立ピッコロ劇団第 77 回公演『スターマン』の受付業務に従事した。この公演は 9 月 30 日から 10 月 5 日までの 6 日間（休演日 1 日を含む）の日程で行われており、この日は千穐楽（最終公演）の前日であった。

受付開始以前に、全体の進行確認が行われた。インターン参加者 5 名の内訳は、1 名がチケットのもぎり[2]、2 名がパンフレット配布、残り 2 名が物販[3]に配置された（筆者はパンフレット配布を担当）。それ以外に、予約や劇団の後援会参加者などの対応に 3 名[4]、劇団員との面会希望者などの対応に 1 名、また新倉氏と劇団部長の田窪哲旨氏は具体的な担当を決めず全体を見回し、自由に移動できる立場にいた。今回、定員 400 名弱の劇場の受付業務に、10 名以上の人が動くことを知った[5]。劇場の定員数と受付業

---

[2] チケットのもぎりをインターン生のみで担当したわけではなく、もう 1 名、今回出演されないピッコロ劇団のベテラン劇団員が配置された。

[3] 今回上演された『スターマン』の作者・岩松了氏の著作『岩松了戯曲集 1986-1999』および『岩松了戯曲集 2000-2022』（ともにリトル・モア、2022 年）の販売。ただし、これらの戯曲集には今回上演された『スターマン』は収録されていない。

[4] 開場後には、その 3 名に加えて林館長も参加された。

[5] なお、10 月 4 日夜公演の来場者は 100 名程、千穐楽 10 月 5 日昼公演の来場者は 150 名弱であった。

務従事者の数は単純に比例するものではなく、より小規模の会場であるほど、定員数に対し必要な受付人員の数は増えるであろうが、受付回りの業務のスムーズな進行には、この程度の人員が必要であることを感じた。

開演後には、インターン生の３名（筆者含む）は公演を鑑賞させていただいた。受付業務に参加した劇団員の一部も、同じく鑑賞されていた。その後、終演と共にホールの扉を開き、お客様をお見送りした後、閉場業務に参加し、受付回りの片付け終了後、初日は解散となった。

○2 日目　10 月 5 日(木)12:30～19:30

2 日目は来館次第、前日に引き続き、ピッコロ劇団公演『スターマン』の受付業務に従事した。この日は千穐楽（最終公演）である。配置などは前日と異なった（筆者はチケットもぎりを担当）が、近くで他の受講生の動きも目にしていたので、様子が推測でき、前日よりスムーズに行うことができた。

上演中は大きな仕事がなかったこともあり、時間を見て、新倉氏から制作業務について、話をうかがうことができた。キャスティング・チラシ制作・広報活動・受付準備・公演時の進行など、基本的に舞台「以外」のことを、ほぼ全て担当される印象である。公演のどれぐらい前から動き出すのか、どのようなサイクルで動いているのかといった、具体的なお話もお伺いできて、参考となった。

公演終了後、この日は千穐楽のため、ピッコロ劇団代表で今回上演された『スターマン』の作・演出を担当された岩松了氏と、初日および 2 日目に来場客から公募した人のアフタートーク（実質的には質疑応答）という特別企画が行われた。新倉氏によると、企画をされたのは岩松了氏で、今回が初めてとのこと。なお、司会は新倉氏が担当された。インターン参加者もアフタートークを拝聴させていただいたが、今回登壇したのは、演劇に興味関心を強く持つ高校生男女各 1 名[6]であり、踏み込んだ質問も出て、なかなか刺激的であった。正直なところ、筆者がこの企画を目にした際、演劇を長年見てきた中年以上の「通」と呼ばれるような客が登壇することをイメージしていただけに、高校生という若者が選ばれたところに清新かつ意外の感を抱いた。演劇界の不文律などを共有していない相手であろうし、場合によっては場が持つのか、崩壊しないのかの危険性もあろうが、今回の『スターマン』のような、見終わった後に、あれこれ考えるところに面白みのある演劇では、このような形で感想を共有することも有意義であろう。冒険的ではあるが、今後も続くと、先に何らかの展開も可能ではないかと思える企画である。

アフタートーク終了後は終演業務を行った。千穐楽であるため、前日は行っていない受付道具の撤収作業の後、ピッコロシアター劇団部長の田窪氏よりピッコロ劇団についてのレクチャーを受けた。前日の林館長のレクチャーと重なる内容もあったが、それはピッコロシアターにおける、ピッコロ劇団の占める大きさを表しているともいえよう。前日と重ならない部分では、劇団が劇場外に出て行うアウトリーチ活動、特に「にほんごであそぼう」と題した、兵庫県小野市で行われている外国人と日本人の交流の場を作る活動例が興味深かった。この場合、演劇ワークショップはあくまで手段であるが、演劇の社会活用という面で、今後の広い可能性があり得るであろう。近年では小野市役所の担当者から、ゴミ出しのルールなどのレクチャーを内容に入れ込む希望が出るなど、外国人と日本人の間でトラブルになり

[6] 男子高校生は演劇部の所属らしく、部活友達だと思われる数名も来場していた。

やすい問題を、解決する手段としても期待されているようだ。

夜に入り、ピッコロ演劇学校の授業を見学させていただいた。ピッコロ演劇学校は本科と研究科に分かれているが、両科とも今月末に前期発表会を控え、その稽古にかかっているところであった。本科では 4 つの班に分かれ、「スマホ」をテーマに、企画立案から台本執筆、演出まで全て学生たちが行うオリジナルの小作品を上演する予定であり、既に立ち稽古に入っている班もあれば、内容吟味中の班もあり、それぞれ活気ある姿を目の当たりにした。研究科では、卒業公演で上演予定のアーサー・ミラー原作、島守辰明氏[7]潤色・演出の『悪魔の降りた町』の具体的なシーンについて、細かな台本内容を読み込み、さらなる検討などを、講師立ち合いのもと行っていた。

2 日目は演劇学校見学が終了次第解散。

〇3 日目　10 月 6 日(金)13:00～20:00

3 日目は来館後、最初は神戸・京都での演劇公演で、ピッコロシアター関連のチラシを配布いただくための挟み込み作業を行った。ピッコロシアター関係だけのものであるが、何枚もあり、それなりに分厚いものとなった。

これはピッコロシアター関係のチラシに限った印象ではないが、演劇の舞台を見に行くと、配布チラシが大変多い。持ち帰るのを躊躇するほどの量である。一方で、現代演劇に慣れていない者の目からすると、演目のタイトルと、演出家や出演者の表記のみに力点がありすぎ、どのような方向性の舞台なのか、どのような観客を期待しているのかが、分かりづらいと感じる。これでは、挟み込み作業を行って多くのチラシを配布したとしても、演出家や出演者の名前に馴染みがない限り、見に行こうという気持ちには繋がりにくいのではないだろうか。しかし、筆者が専門とする能楽のほか伝統芸能のチラシも、愛好者以外の目から見ると同じような欠点を持っている可能性もあろう。作業を行いながら、このように専門違いの分野を見ることで、自らの分野について、気づくこともあることを確認した。

単純作業のため、インターン参加者同士で作業を行いながらも、会話をする時間となった。主な話題は前々日（参加者によっては前日）に拝見した舞台公演『スターマン』の振り返りであった。各々の感想を話しながら、外面的な事件を描くのではなく、登場人物の感情の揺れを描く作品だけに、観劇後に振り返った際に、初めて見えてくる構造を持つ演劇であったことを確認する時間となった。

発送準備が完了すると、次はピッコロ演劇学校およびピッコロ舞台技術学校の概要を、両学校担当の西岡宏季氏からレクチャーを受けた。西岡氏自身も演劇学校の卒業生とのことである。演劇学校は、演技の指導、その成果としての公演は行うものの、俳優養成所ではないことが特に強調された。演劇学校の授業は基本的に週 2 回の夜間のみではあるが、年 2 回の発表会や実習を含むもので、年間授業料が 12～3 万円とのことで、授業料に対して内容は充実し過ぎていると言っても過言ではないだろう。

なお、西岡氏が最初、インターン各受講生の専攻を尋ねられたため、筆者が能楽を専攻していることを話すと、演劇学校で講師を務める能楽師狂言方の善竹隆司氏は、演劇学校の卒業生であると教えていただいた。善竹氏は関西を代表する狂言の家の一つである善竹家当主・二世善竹彌五郎氏の長男で、筆者は、古格を守る実直な芸風を持ち、伝統に忠実な方であるとの印象を抱いていたが、家業の狂言以外

[7] ピッコロ演劇学校研究科講師、ピッコロ劇団劇団員。

の演劇についても、学校に通って習うような積極性を持っていらっしゃることを知り、興味深かった。

レクチャー後、休憩を挟み、ピッコロ舞台技術学校の授業の様子を見学させていただいた。舞台技術学校には、美術・照明・音響の 3 コースが存在する。内、照明と音響の授業は、生徒の実習中でもあり、その様子を眺める程度であったが、美術については、今年は生徒が 2 名と少ないこともあり、講師の加藤登美子氏より、現在、榊原政常作『しんしゃく源氏物語』を想定した舞台セットの模型を作っていると説明いただいた。和風の舞台の例として、過去のピッコロ劇団公演『かさぶた式部考』[8]の写真を見せていただきながら、その舞台美術模型を使って、そこに込められた様々な工夫について語っていただいた。舞台美術において、現代でも尺貫法を使用することが多いという話から、それは歌舞伎の大道具から受け継いだものであろうとの見解もお教えいただいた。そこから日本の舞台美術史へと話題は展開し、江戸時代の長い間、専門の舞台美術家は存在せず、たとえば回り舞台を考案したとされる歌舞伎作者の初代並木正三の時代には、戯曲の作者と職人が相談しながら作ったのではないか、といった話を伺うことができた。

3 日目はピッコロ舞台技術学校の授業見学が終了次第、解散。

〇最終日　10 月 7 日(土)14:30～21:30

最終日は集合次第、ピッコロシアターの貸館と鑑賞サポートについてのレクチャーを、古川氏より受けた。ピッコロシアターが開館した 1978 年（昭和 53 年）には、バリアフリーや鑑賞サポートは全く想定されていなかったため、そのような施設や準備を元来持たないピッコロシアターとしては、決して楽な事業ではないようだ。視覚障害の方向けの音声ガイド、聴覚障害の方向けの手話・字幕などは全公演において行うことができるわけでもなく、音声ガイドでは音漏れ、字幕では舞台上以上に字幕が目立ってしまうといった悪例もあり、単に「やれば良い」というものではない。むしろ、既存の公演に義務的・機械的に追加するのではなく、公演の際に、サポートを行うことを前提に、演出が組み立てられる必要があろう。しかしながら、売り上げとしては現状を大きく変えるものではなく、営利目的である私企業や私設の劇団では行いにくいものだけに、公立劇場としてのピッコロシアターに求められるべきものではないか、とする古川氏の言葉に、筆者も大きく同意するばかりである。

その後は、来年 2 月にピッコロ劇団によって兵庫県立芸術文化センターでの上演が予定されている、カレル・チャペック作、田才益夫翻訳『ロボット―RUR―』[9]の稽古用台本準備のため、戯曲の内容を PC に入力をする作業を体験した。限られた時間であり、ごく一部を入力したに過ぎないが、このような内容も、制作担当である事務方が担当されていることに驚いた。ただし、組織によって、分担は異なり、ピッコロ劇団では事務方が担当するが、役者側で用意する劇団もあるとのことであった。

休憩を挟み、ピッコロ演劇学校およびピッコロ舞台技術学校の生徒向けに行われた、ピッコロ劇団代

---

[8] 兵庫県立ピッコロ劇団第 59 回公演 秋元松代・作　藤原新平（文学座）・演出『かさぶた式部考』2017 年（平成 29 年）9 月 24 日（相生市文化会館扶桑電通なぎさホール大ホール）、9 月 29 日～10 月 4 日（ピッコロシアター大ホール）、10 月 14 日～10 月 15 日（世田谷パブリックシアター）。

[9] 兵庫県立ピッコロ劇団第 78 回公演の予定。

表の岩松了氏の特別講義を聴講させていただいた。テーマは「演劇的な言葉について」である。これは岩松氏が講義をする形ではなく、両学校の生徒が先日の公演『スターマン』を観劇した上で、それに戯曲作者であり、演出もつとめられた岩松氏に対して質問する形式であった。インターン生も質問をする機会を与えられた。それらの質疑応答の中で、同じく岩松氏作の戯曲『アイスクリームマン』の冒頭部分の朗読が、ピッコロ演劇学校の研究生を中心に行われた。それらのやりとりを聞いている中で、筆者には、岩松氏が、質疑応答の中で、単純な正解を提示することを避けられているように感じた。セリフの内容そのものよりも、その言葉が発せられた理由は何故なのか、それを受講者に考えさせることが、岩松氏の目的であり、岩松氏にとっての言葉の扱い、戯曲上のセリフ術なのではないだろうか、と筆者なりにはとらえた。

講義終了後、改めてインターン生で岩松氏にお礼を申し上げた。その後、ピッコロシアターの資料室の資料を拝見、過去のピッコロ劇団の上演演目などを説明いただいて、インターンの全日程が終了した。

【インターンを終えて】

わずか 4 日間ではあったが、大変濃い内容のインターンとなった。筆者がこのインターンを受講した目的は、専門劇場でどのような制作が行われているのか、それを経験し、学び、今後に生かすことである。

筆者には、研究の専門である能楽を中心に、少しではあるが、伝統芸能公演を企画・制作した経験がある。しかし、それは好きで関わっている内に「なんとなく」の経験則しかないままに、見様見真似で行っているものであり、他の制作の実際を学ぶ機会を求めていた。今回はありがたくも、以前から求めていた機会を得た。

受付業務に参加させていただいたが、12 名もの人が動いていることは純粋に驚きであった。筆者自身が主催や制作をつとめた公演において、予算の都合でもあるが、公演に直結しない部分として、できるだけ削ろうとする、今までの自分の方向性は大いに恥じたい。また、制作者でかつ主催者である場合、受付関係のイレギュラーな状況に対応できるほぼ唯一の立場であるにも関わらず、楽屋側の世話も兼任する場合もあって、それが余裕のない運営に繋がっていることを感じた。今後、企画運営を行う場合は、来場者の満足度を高めるためにも、舞台以外のところに、より目を向けるべきであろう。

現代演劇と伝統芸能では、表現形式については、大きな差異もある。特に能楽では、決まった能舞台という舞台が存在し、舞台美術・照明・音響といったものは基本的には使用しない。しかし、能舞台がない地域で上演する場合、会場には地域の多目的ホールを使用することとなり、その場合、専門の能舞台と同様な環境にするためであっても、舞台美術・照明・音響が必要となる。しかし、私も、そして出演者たる能楽師も、あまりに無知なままに、それが行われていないだろうか。能舞台で上演するのが本来であり、それ以外のものは亜流であるとする考え方に、一定の妥当性はあるが（だからこそ”伝統”芸能なのである）、形式や様式を守ること自体が目的化してしまうと、問題が多い。上演する場が変われば、それに合わせて、工夫する必要があるだろう。ただし、筆者独りで危機感を抱いてもあまり意味はない。出演者たる能楽師のほか、関係者の中に似た考えを持つ賛同者を増やし、実現に向けていく努力が必要である。

また、鑑賞サポートの字幕・音声ガイドについても大変興味を抱いた。それは、伝統芸能では使用さ

れる言葉が現代人にとって難しいため、鑑賞者の聴覚や視覚の障害の有無とは関係なく、音声ガイドや字幕が行われる公演が増えており、触れることが少なくないためである。しかし、たとえば国立文楽劇場の文楽公演での字幕表示は、演技する人形ではなく、字幕に目がいってしまうとの指摘があるなど、必ずしも十分な検討が行われないままに、実行されている面もあろう。また、現代の伝統芸能における字幕や音声ガイドは、身体に障害を持つ人を対象としたものではないため、障害を意識すると、行き届いていない点もまた、多々存在するであろう。

ユニバーサルデザインという考え方がある。「すべての人のためのデザイン」を意味し、年齢や障害の有無などに関わらず、最初からできるだけ多くの人が利用可能となることを目指してデザインすることである。この考え方を音声ガイドや字幕に応用することも可能であろう。視覚や聴覚に限らず、身体障害を持っている人にやさしい劇場・舞台は、障害を持たない人にとってもやさしいのではないだろうか。鑑賞サポートは、単に障害を持つ人向けではなく、広い意味で鑑賞の助けになり、それがあるならば行ってみようかなと思わせるための仕掛けであるべきだと考えるのである。劇場へ足を運ぶ人口の増加にも資するであろう。

また、そもそも身体障害を持っている人は、舞台芸術を楽しんだ経験がないことが多く、サポートを行うだけでは来場に直結はしないだろう。単に字幕や音声ガイドを行うことは基本として大切であるが、たとえば劇場に障害を持つ人々を迎えるのではなく、障害を持つ人々のコミュニティに演劇が出かけていくこともまた、広い意味での鑑賞サポートになりえないだろうか。それには、障害を持つ人向けではないが、先に述べた「にほんごであそぼう」のような、言語的な「障害」を持ち、また文化的背景の異なる相手を対象とした活動が参考になるであろう。演劇自体が目的ではなく、演劇を課題解決のための手段の一つとして扱うあたりも、広く社会に訴えかけていく場合には必要なことだと感じている。

以上の鑑賞サポートに対する姿勢は、言うは易く、行うは難いことであろう。公演期間の長い歌舞伎や文楽では、株式会社イヤホンガイドが先に音声を制作し、当日に再生機械の有料貸出を事業として行っている。しかし、公演日数の少ない演劇や、基本的に一回公演である能楽において、同様の施策を行うことは難しい。

そして、実況解説となる場合は、その実況者個人の技量に大きく左右される面が多い。ピッコロシアターの場合は、その公演に出演しない劇団員が担当されるという。その劇団員は舞台への出演を行わないが、練習には出席し、出演者や演出家の様子を学び、それを音声ガイドに反映させる。ピッコロ劇団が県立の劇団であり、直接の出演でなくとも、劇団員の予定を確保することができるから可能な形であろう。また、劇団としての仕事であることから、そのノウハウを団体として保持し、別の劇団員が担当する際に、以前に担当した劇団員から経験知の共有や、場合によっては指導を行うことも可能である点も優れた点であろう。

筆者個人の経験になるが、何度か、能楽公演の音声ガイドを担当したことがある。その際には、事前に上演演目の詞章と演出を確認し、話すべき内容を準備した上で臨んでいるが、内容以外にも発声やタイミングなどに、問題点があることを感じている。正直なところ、実況解説では、担当者の個人技の範囲を超えるのが難しいのではないだろうか。せめて全体的な質の向上や方法論を生み出すために、ピッ

コロ劇団の例に倣い、音声ガイドを担当する者同士での情報共有の場などを、ハードウェアの提供者[10]などを軸として作ることができないだろうか。今回のインターンを終えて、思いついたことの一つである。

最後に、今回のインターンについて、受け入れていただいたピッコロシアターの職員の皆様、特に 4 日間、お相手いただいた古川氏・新倉氏に改めて深く御礼申し上げる。

[10] 能楽公演では一般社団法人衆我財団が、各公演の主催者に対して機器の貸し出し事業を行っている。

音楽関係インターンシップ概要

人文学研究科教授　伊東信宏

音楽学研究室では、これまで 20 年近く、主としてクラシック音楽に関係するインターンシップを行ってきた。ご協力いただいてきた機関は、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホール、箕面市メイプル財団（箕面市立メイプルホール）などである。近年、音楽学研究室を卒業、修了して、いわゆる音楽マネジメントに関する仕事に就く卒業生が毎年おり、このインターンシップもいくらかはこのような進路に寄与しているのではないかと思われる。

2023 年度は、このうちザ・フェニックスホール、京都コンサートホールに受け入れをお願いし、学部 3 年生、大学院博士前期課程 1 年生を対象としてインターン実施した。以下にザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについて、受講生からの報告を掲載する。

以下、インターンシップ関連の出来事を時系列に即してここにまとめておく。

▪2023 年 4 月の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。学部生 3 名、院生 3 名について派遣先を仮決定。
▪2023 年 11 月 16 日、11 月 25 日、12 月 15 日、12 月 21 日の 4 日間、ザ・フェニックスホールで学部生 3 名のインターンシップを実施した。
▪2023 年 12 月 18 日、19 日、21 日の 3 日間、京都コンサートホールで院生 3 名のインターンシップを実施した。
▪2024 年 6 月末までに、上記 2 館でのインターンシップについて報告書を作成し、その後各ホールに確認してもらった。
▪2024 年 7 月 23 日（火）に報告会を開催する予定。

本年度も快く受講生を受け入れていただいたザ・フェニックスホール、京都コンサートホールのスタッフの方々に深くお礼を申し上げます。今後も引き続き、よろしくお願いいたします。

2.1　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール インターンシップ報告

文学部人文学科音楽学専修 3 年 久米羽奏・藤井花鈴・三木のどか

【研修概要】
日時：11 月 16 日(木)、11 月 25 日(土)、12 月 15 日(金)、12 月 21 日(木)
場所：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール 5F リハーサル室

【ホール概要】
1995 年、旧同和火災海上保険株式会社の創立 50 周年にあたり、現在の親会社、あいおいニッセイ同和損害保険会社によって開設された。ホールのコンセプトは、あいおいニッセイ同和損保の社会貢献活動（芸術文化支援）の拠点として芸術、文化を長期的に支援していくことである。このため、自主企画公演を開催し、クラシック音楽をメインに、小ホールの特性を最大限に生かしたユニークなプログラムを企画・構成し、芸術・文化の発信基地としての役割を果たしている。

名称：あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
（Aioi Nissay Dowa Insurance THE PHOENIX HALL）
所在：大阪市北区西天満 4-15-10（梅田新道東南角）
あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー内
開館：1995 年 5 月 13 日
運営管理：MS＆AD ビジネスサポート株式会社
客席：標準 301 席（最大 335 席）
ホール 1 階席（建物 3F）：標準 168 席（可動、最大 202 席）
ホール 2 階席（建物 4F）：133 席（固定）
構造：乾式浮き構造
天井高：13m

【期間中の公演概要】

11 月 25 日（土）
公演名：レクチャーコンサートシリーズ 33「ピアノ三重奏の歴史」vol.2
「狂乱のベル・エポック~大乱闘フレンチ・コンポーザーズ~」
会場： あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
日時： 2023 年 11 月 25 日(土)15:00 開演/14:30 開場
料金： 一般/￥3,500 友の会/￥3,150 学生(25 歳以下)/￥1,000
出演者： 郷古廉(ヴァイオリン)水野優也(チェロ)水谷友彦(ピアノ)松井拓史(レクチャー)

曲目： フランク：ピアノ三重奏曲 op.1-2 変ロ長調(1839-42)より第 1 楽章
ダンディ：ピアノ三重奏曲 第 1 番 op.29 変ロ長調(1887)より第 1・3 楽章
ラヴェル：ピアノ三重奏曲 イ短調(1914)より全楽章
主催： あいおいニッセイ同和損保、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
協賛： 鹿島建設株式会社、SUNTORY

12 月 15 日（金）
公演名： ティータイムコンサートシリーズ 166
「聖なるア・カペラの響き~クアルトナル・クリスマスコンサート~」
会場： あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
日時： 2023 年 12 月 15 日(金) 14:00 開演/13:30 開場
料金： 一般/￥3,500 友の会/￥3,150 学生(25 歳以下)/￥1,000
出演者： ミルコ・ルートヴィッヒ、ジョー・ホルツワース(以上テノール)
クリストフ・ベーム(バリトン)、ゼンケ・タムス・フライアー(バス)
曲目： グレゴリオ聖歌：喜び給え、J.S.バッハ：優しくも愛らしき　ほか
主催： あいおいニッセイ同和損保、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
協賛： 鹿島建設株式会社、SUNTORY
協力： モロゾフ株式会社

【研修内容】
〈1 日目〉

9:30	１階ロビー集合
9:40-9:50	ホール職員紹介(全体朝礼)、学生自己紹介
10:00-11:00	ザ・フェニックスホールの概要説明
11:00-12:00	ホール館内見学
12:00-13:00	昼休憩
13:00-14:00	ホール事業説明①貸ホール、貸館公演について
14:30-16:30	ホール事業説明②主催公演について
16:45-17:15	課題について説明、終礼

〈2 日目〉

13:30	１階ロビー集合
13:40-14:30	１日目の振り返り、質問受付など
14:30-17:00	公演を客席にて見学
17:00-17:30	終礼

〈3 日目〉

9:30	1 階ロビー集合
9:40-10:30	ホール内の公演準備①ケータリング等
	ホール内の公演準備② 1 階受付準備
	ホール内の公演準備③設備点検
11:00-11:30	リハーサル見学
11:30-12:15	昼休憩
12:15-12:25	レセプショニスト打ち合わせ見学
13:00-13:45	チケットセンター業務見学
14:00-16:00	公演を客席にて見学
16:00-16:30	公演片付け・終礼

〈4 日目〉

9:45	1 階ロビー集合
10:00-12:00	課題発表・ディスカッション・振り返り
12:00	終了

【研修内容詳細】

〈1 日目〉

全体朝礼に参加し挨拶や自己紹介を終えたのち、支配人の上田さんからホールの概要や運営方針、組織体制についての説明を受けた。年間公演数などのホールの運営状況や、ホールが持つ、企業メセナ活動の拠点としての性質についてお話しいただいた。

その後、館内を案内していただいた。ホールの構造や飾られている美術作品（多くが音楽に関するものであった）に加えて、機械室や各控室、舞台奥側の可動式遮光壁が実際に動いている様子なども見学することができた。

午後からは、プロの演奏家にホールを貸し出す貸館公演と、ホールが主催する自主企画公演についてレクチャーを受けた。貸館公演は、年間公演数の大半を占めるものであり、ホールのイメージやステータスを守るため、貸館対象には一定の基準が設けられている。対して「レクチャーコンサートシリーズ」や「ティータイムコンサートシリーズ」など 7 つのシリーズから構成される自主企画公演は、メセナ活動の趣旨に沿って運営され、若手演奏家への機会提供や聴衆へのレクチャーなどを通じて社会貢献を行っている。音楽事務所や音楽学者からの提案や、ホール職員の方が注目しているアーティストや作品を起点に企画される主催公演は、貸館公演の内容にも影響するなど、ホールの性格を決定づける重要なものであると伺った。また、レクチャー内では公演が「誰に向けたものか」ということを常に意識することの重要性が強調され、これは最終日に発表する課題内容にもつながるものであった。最後に、インターンシップ最終日に提出する課題についての説明を受け、1 日目は解散となった。

〈2 日目〉

2 日目の主な活動は公演見学である。この日の公演はベル・エポック期フランス音楽界についてのレ

クチャー付きコンサートであった。客層は高齢者も多いが若者も目測２割ほど来場しており、若い層のプレイヤーが勉強のために聴きに来たのではないかと予想した。また、公演名に”vol.2”とある通り、「ピアノ三重奏の歴史」は 2021 年 2 月に行われた第１回公演より続くシリーズ公演であった。開演中、出演者が前回のコンサートにも来場した人に挙手を募ったところ、２～３割程度の観客が手を挙げていた。レクチャー内容は本来複雑で一般に馴染みのない内容であったはずだが、分かりやすくエンタメ的にまとめられており、開演中には時折笑いも起きるような和やかな雰囲気であった。今回のインターンシップという立場において公演を見学することで、普段はあまり気にすることのない客層や公演の雰囲気を意識しながら聴くことができたのが新鮮であった。３日目の説明を受け、２日目は解散となった。

〈3 日目〉

3 日目も、公演見学を中心として活動させていただいた。公演はア・カペラ男声グループによるもので、ティータイムコンサートシリーズの一環として実施された。

午前中はホール内の公演準備やリハーサルの様子を見学させていただいた。曲目変更によるプログラムの差し替えについてお話を伺い、緊急時の対応について学んだ。また、リハーサルの際、本番の舞台ライトの色をどうするか打ち合わせされていたことが印象的だった。午後にはレセプショニストの打ち合わせを見学させていただき、「遅れて来られたお客様への対応」など綿密な情報共有をされていた。

開場後は、チケットセンター業務を見学させていただいた後、客席で公演を見学した。公演後は、来場者にお菓子を配り、お見送りを行った。準備から公演後の片づけまで携わらせていただき、貴重な経験となった。

〈4 日目〉

4 日目は、課題発表と課題についてのディスカッション、インターンシップ全体の振り返りを行った。

課題は①「『フェニックス・エヴォリューション・シリーズ』にふさわしい公演企画」②「その公演企画を実現する際に気を付ける点や課題」③「クラシック音楽コンサートの宣伝方法についての意見」を考えることであった。インターンシップ生が各々の課題を発表した後、インターンシップ生どうしでコメントや質問などを出し合った。職員の方々にもたくさんのコメントをいただき、大変貴重な機会だった。「他のホールがやらないことをやろうとする精神」と「集客のための現実的な観点」の両立が重要だというお話が非常に印象に残っている。

インターンシップ全体の振り返りのなかでは、音楽ホールで働くということ全般についてのお話から、施設の詳細な点についてまで、様々なご質問をさせていただいた。

【所感】

今回のインターンシップを通じて、今までは観客や演者として関わってきたホールの裏側を実見するともに、ホールの運営が、芸術性や採算性、学問性などの様々な要素間の絶妙なバランスの中で成立しているということを学んだ。特に、事業企画に関して、昨今の音楽ホール業界が置かれている厳しい状況下においては、地域振興や教育、観光などといったアート以外の側面にも積極的に目を向ける必要があるというお話が印象に残り、自分自身の演奏会に対する新たな判断基準を手に入れることができた。

また、インターンシップ期間中に二公演を見学させていただく中で、聴衆の手の内に収まりきらない体験をもたらし、様々な方面から社会に価値を提供する音楽ホールの力を改めて確認することができた。余談ではあるが、インターンシップ後公演チケットを購入するためチケットセンターに赴いたところ、上田支配人をはじめとするホール職員の方々に非常に親切に対応していただいた。このご厚意と、お忙しい中我々インターン生を受け入れてくださったことについて、この場を借りてお礼申し上げたい。

（三木）

インターンシップを通して、ザ・フェニックスホールで働かれている方々から様々なお話を伺い、普段はできない多くの経験をさせていただいた。館内見学では、観客側や出演者側からは見ることのできないホールの裏側を見学させていただき、ホールに対する見方が変化した。今後ホールを訪れる際に、その裏側の構造について、これまでよりも広い視野と想像力をもって捉えたいと考えている。また、公演の準備についてご説明いただいたなかで、「普段は出演者の方々にパンやサンドイッチなどの軽食を準備しているが、今回は出演者（ア・カペラ男声グループ）の方々が海外からいらっしゃっていることに合わせて、おにぎりを準備している」とのお話が印象的だった。インターンシップを通じて公演当日までに多くの労力や時間が費やされているということを実感し感銘をうけたのはもちろんだが、やはり公演当日ならではの緊張感や現場での出演者やそのマネージャーへの細かな気配りを強く感じた。

全体を通して、「集客数を意識しつつ、その一方で今までにない新しい取り組みを行っていく」といった２つの考え方の両立が強く感じられた。働かれている方々の、よりよい公演を目指し、常に新たな策を考えて尽力されている姿がとても印象にのこっている。

このたびは、お忙しい中インターン生をご指導いただき、本当にありがとうございました。（久米）

普段、私は楽団員としてホールのお世話になることが多い立場だが、今回のインターンシップはザ・フェニックスホールの持つ理念、立場、場所などの視点からコンサートについて考えることのできる貴重な機会となった。特に、主催公演の説明をいただいた宮地マネージャーの「お客さんはコンサートへの期待値でチケットを買うしかない」という言葉が印象に残っている。そのため、単発のコンサートでは期待が高まるような一工夫がなければ企画を通すことはないという。４日目の課題発表では私の企画に対して「分かりやすい魅力」を打ち出せていないとご指摘いただき、学問的な興味と、コンサートとしての魅力との違いを深く考えることができた。

また、インターンシップ全体を通して、ホールの皆さまが常に新しいことを模索し、試す姿勢を強く感じた。例えば貸館公演では最近 YouTuber のコンサートを行うこともあったというし、公演準備期間には出演者によって対応の仕方や用意する軽食も変わってくるそうだ。加えて、ホールの皆さまが我々インターン生の音楽の聴き方についてご興味を持たれる様子もあった。現在あるホールのイメージを守りながらも、新たな道を調査し、挑戦し続ける姿勢には、ホールと出演者、そしてお客様との間のコミュニケーションが感じられた。

大変に貴重な体験をさせていただきました。お忙しい中、我々インターン生をお迎えいただいたことに深く感謝申し上げます。（藤井）

2.2　京都コンサートホール・インターンシップ報告書

人文学研究科　芸術学専攻　音楽学研究室

博士前期課程 1 年　村田クレイグ、上原智子、張子葳

【研修先】
京都コンサートホール

【研修日程】
2023 年 12 月 18 日（月）、19 日（火）、21 日（木）

【ホール概要】
開館　　1995 年 10 月 15 日
所在地　　京都市左京区下鴨半木町 1-26
建築設計　磯崎新アトリエ
音響設計　永田音響設計

・大ホール
総席数　1,839 席（うち車椅子席 6）
「“シューボックス”（靴箱）と呼ばれる特有のホール形状は、ウィーンやボストンなどの世界有数の名ホールに採用されてきたもの。大ホールでは、その古典的なシューボックス型を基本に踏まえながら、さらに現代的な洗練を加え、1800 の客席とステージが一体化できる華麗な音響空間を創造しました。演奏が始まるや、ホール全体が歌いだしたかのように響きだす。まさに五感を呼び覚ますホールです。」（公式サイトより）

パイプオルガンについて
作製：ヨハネス・クライス社。ストップ数 90、パイプ数 7,155 本、4 段手鍵盤＋足鍵盤

・小ホール（アンサンブルホールムラタ）
総席数　514 席（うち車椅子席 4）
「30 人程度までの小編成のオーケストラ、そしてピアノや室内楽の演奏と鑑賞に最適の音響効果を発揮する空間。それがアンサンブルホールムラタ（小ホール）です。星座の描かれた天井、UFO を思わせる舞台照明、磁北を知らせる光のラインなど、独特の雰囲気を醸しだすインテリアに包まれながら、演奏者の息づかいまでが伝わるほどの距離感で身近に音楽とふれあう―。アンサンブルホールムラタは、心地よく音楽と対話するためにしつらえられた小宇宙といってもよいでしょう。繊細なピアノソロや澄

みきった弦楽の調べを心ゆくまでお楽しみください。」（公式サイトより）

【期間中の公演概要】
公演名：京都北山マチネ・シリーズ　Vol. 16　「華麗なるトランペット・サウンド」
場所：アンサンブルホールムラタ（小ホール）
日時：2023 年 12 月 19 日（火）11:00 開演
料金：1,500 円（全席指定）
出演・曲名：藤井虹太郎（トランペット）、天勝悠太（ピアノ）
オネゲル：イントラーダ
ベルテロ：魅力的なカブリエルによる変奏曲
ボザ：ルスティーク
グラズノフ：アルバムブラット 変ニ長調
ラフマニノフ：ヴォカリーズ
ペスキン：トランペット協奏曲第 1 番 ハ短調
主催：京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）/　京都市
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業）/
独立行政法人日本芸術文化振興会
後援：村田機械株式会社

【期間中のアウトリーチ概要】
Join us（ジョイナス）！～キョウト・ミュージック・アウトリーチ～
場所：京都文教短期大学附属小学校　体育館
テーマ：楽器や作品への理解を深める
目標：音楽に興味を持つ
日時：2023 年 12 月 21 日（木）10:40-11:25
参加人数：6 年生（29 名）
訪問アーティスト・曲名：福田彩乃（サクソフォーン）、曽我部智花（ピアノ）
小さな世界
コンチェルティーノ（カット版）
サックス・ヒーロー
サクス・オン・フン（カット版）
動物の謝肉祭より亀
天国と地獄より序曲抜粋
シーガル
スイス軍の行進
担当：京都コンサートホール事業企画課

【研修概要】
一日目 12 月 18 日(月) 10:00～16:00
① 事業紹介
② SNS 原稿作成
③ 翌日公演のチラシ挟み込み
④ 座学：広報について

二日目 12 月 19 日(火) 9:00～16:00
① 「京都北山マチネ・シリーズ」公演 リハーサル写真撮影
② 公演準備手伝い・鑑賞
③ 公演レポート執筆
④ 座学：企画の立て方

三日目 12 月 21 日(木) 10:20～16:30
① アウトリーチコンサート見学
② アーティストへのフィードバック・レポート執筆
③ ワークショップ：企画を考えてみよう
【研修内容報告】
＜１日目＞
午前中に京都コンサートホールの会議室に集まり、高野課長をはじめ、事業企画課スタッフの皆様に挨拶と自己紹介をさせていただいた。インターンシップについて三日間の流れなどの簡単なオリエンテーションを受けた後、陶器さんの案内のもと、実際にホールの施設見学ツアーをした。
京都コンサートホールは大ホールと小ホールで構成されている。大ホールはシューボックスの作りになっており、天井にある突起物は音を反射するための役割を担っていると同時に、「天の川」をイメージしている。また、日本最大級のオルガンが設置されており、「尺八」など 4 種類の和楽器の音も出せるのが最大の特徴である。次に小ホールについて、京都市では景観を損なわないために建物の高さ制限を設けているが、小ホールの作りは逆にその制限を利用していると説明を受けた。 高さを抑えて「六角形」に作ることで、音を小ホール全体にいきわたらせ、残響時間を引き延ばすことに成功している。 また、小ホールの形に合わせて天井照明が配置されており、「ＵＦＯ」のような見た目になっている。
見学ツアー終了後、高野課長による京都コンサートホールの自主事業について教えていただいた。本ホールの使命は「地元・京都の音楽家」を支え、「若手音楽家」を育てるということを元に、以下の 7 つの自主事業を組み立てている。

1. 「クラシック音楽の殿堂」としての事業
2. 京都市交響楽団の活動拠点としての事業
3. パイプオルガンを活用した事業
4. 京都コンサートホールの独自企画（例：若手音楽家を宣伝する活動企画）

5. 人材養成事業
6. 普及事業（例：違うファン層誘致活動）
7. 社会包摂事業（例：アウトリーチ活動）

午後の時間では、京都コンサートホールの SNS 原稿を作成し、投稿するまでの一連の作業を実際に体験した。まず、インターンシップ生として本日行った活動内容や学びを文章化して、高野課長に校正・校閲をしていただいた後、正式に SNS に投稿できる。その後、翌日に開催する「京都北山マチネ・シリーズ」コンサートで配布予定のチラシの挟み込みをした。京都コンサートホールにお越しくださる方々に公演情報が届くように、一枚一枚のチラシに込められた多くの人々の想いと情熱を改めて感じた。

1 日目の最後は、中田さんによる「広報について知ろう」という講座をしていただいた。広報を考える際、主に以下の四つの指針を中心に考える必要がある。

1. 伝えたいことを整理する
    a. 何を知って欲しいか＝推しポイント（What）
    b. なぜ知って欲しいか＝広報の目的（Why）
2. ターゲットの設定
    a. 誰に知ってもらうのか（Who）
3. 具体的な広報内容を考える
    a. どこで広報するのか（Where）
    b. どのように伝えるか（How）
    c. 見せ方・デザイン
    d. 予算との兼ね合い
4. スケジュール立て
    a. いつ伝えるか（When）

これらの指針の元、実例を交えながら、京都コンサートホールの広報活動はどのようなプロセスで組み立てているのかを学ぶことができた。（張）

＜2日目＞

京都コンサートホールの自主事業である「京都北山マチネ・シリーズ」の 16 回目「華麗なるトランペット・サウンド」が開催された。本シリーズは、チケットを低価格（1,500 円）で提供、MC 有りの尺の短いコンサートを平日の昼間に開催することで、市民に気軽に演奏会を楽しんでもらうことを目的としている。また、正午に終演するため、ホールが北山周辺の飲食店と提携したキャンペーンを行うことで、コンサート後にランチに足を運びやすくし、地域の活性化にも寄与している。

公演当日、インターン生が体験した演奏会の流れは次の通りである。

9:00　楽屋、チケット売り場の準備
9:30　出演者リハーサル時に記録用写真の撮影
10:00　チケット対応、列整備等準備
10:30　開場（チケット対応、列整備等）
11:00　開演（客席で鑑賞）
12:00　終演・見送り
12:30　楽屋、チケット売り場、アンケート回収等片付け
13:00　終了

他にも、ホールの職員の方が対応していた外部委託のサポートスタッフの方々との打ち合わせの仕事等もあり、現場は忙しそうな様子だった。また、10 時半開場ということもあり、限られた準備時間で仕事を的確に行う必要があった。

終演後は、公演レポートを執筆した。公演レポートは、公演が終わるごとにまとめられ、リハーサル時に撮影した写真と共に SNS に投稿される。一回一回の公演の様子と次回の予告を発信することで、コンサートを観た人だけでなく、観たことのない人も会場内の様子を写真と文章から知覚でき、「次、行ってみようかな」という、意欲を掻き立てる効果があるのではないかと感じた。また、公演レポートに限らないことだが、担当者が書いたレポートは部署の中で回され、最終的に課長のチェックが通ってから配信される。この一連の作業を経ることで、さまざまな立場から文章が推敲され、より完成度の高いものが発信されている。

2 日目の最後は、高野課長より企画の立て方についてのお話を伺った。いくら企画者が面白いと考えている企画でも、その公演を行う理由を 5Ｗ1Ｈに当てはめて説明できないと、自己満足的なものに終わってしまう。また、企画が通ると、次は出演交渉やプログラム、チラシ作製、広報活動等を行っていく必要がある。これら全ての仕事をひとつひとつ着実に行うことで、数時間のコンサートがひとつ出来上がるのである。（村田）

＜3 日目＞

文教小学校にて行われたアウトリーチ・コンサートの見学を行った。アウトリーチ・コンサートは、京都コンサートホールへの来館が難しい方や、クラシック音楽に接する機会の少ない方などに、クラシック音楽の生演奏を届けることを目的として開催されており、インターン生はサクソフォーン奏者福田彩乃さんの公演を見学した。当企画は登録アーティスト制となっており、アーティストは 1 年間かけて公演内容をブラッシュアップしていく。私たちが見学させていただいた 12 月にはすでに 8 ヶ月間活動されていることもあり、普段クラシックに馴染みのない小学生の生徒たちを魅了する仕掛けが数多く見受けられた。

公演開始時には、やや緊張感のあった会場が、子どもたちにもおなじみの「小さな世界」の演奏やクイズなどを通じて、徐々に変化していったのを体感したとともに、福田さん自身が中学からサクソフォーンを始められていたお話をされていたことで、これから中学校に入学する生徒たちに一つの可能性を感じさせていたことも印象的であった。

公演終了後は、京都コンサートホールにて、アーティストへのフィードバックと公演レポートを執筆した。アウトリーチコンサートの後は毎回、アーティストと担当の方で振り返りを行い、次の公演に反映しているとお聞きし、クラシックコンサートの普及を進めると同時に、若手音楽家の成長の場としても大きな役割を果たしていると感じた。

3 日間のインターンの最後には、インターン生 3 人それぞれがクラシックコンサートの企画考案を行い、企画課の皆様にフィードバックをいただいた。イベントの規模感や予算、ターゲット層の選定など、様々な視点から指摘や質問をいただき、実際にイベント・コンサートを企画・運営し、採算を取ること、普段クラシックに興味がない方々にコンサートに足を運んでいただくことの難しさを実感した。(上原)

【3 日間全体の感想】

長らく足が遠のいていたクラシック音楽の場に出向くことができ、愛と誇りを持って音楽の現場を支えていらっしゃる方々にお会いすることができたことが、非常に貴重な経験となった。京都コンサートホールは、地元に根差し、演者とお客さんの両方に寄り添った企画をされていることが非常に印象的であり、クラシック通のお客さんから普段馴染みのない小学生まで、有名な音楽家から期待の若手まで、全ての人が楽しんで、輝くことのできる場を提供していると知ることができた。また、このような素晴らしい企画を行いながらも、採算を取ることもきちんと考慮されており、仕事として音楽に関わることの難しさや面白さを垣間見ることもできた。

インターン期間中には素敵な公演に立ち会う機会を 2 度もいただき、トランペットやサクソフォンという楽器の面白さも知るきっかけとなった。今回のインターンを機に、またクラシック音楽に触れる機会を増やし、コンサートホールにも定期的に足を運びたいと感じるようになった。(上原)

企画や広報についての話をお聞きする中で、京都コンサートホールの職員の方々は、ひとりひとりバックグラウンドが違い、専門とする音楽ジャンルも異なっていることがわかった。ホールには、様々な時代と編成に対応した楽器が充実している。パイプ・オルガン、チェンバロ、ポジティフオルガン等々を最大限に活用するべく、世界各地からそれぞれの楽器のスペシャリストを招聘するために、その専門性が発揮されていると感じた。

また、チームが一体となって企画を作る様子は、オーケストラと指揮者の関係にも似ていると思った。指揮者が提示する「企画」をオーケストラの団員の意志と擦り合わせながら、長い期間をかけて、「1 回の演奏」のためにひとつの作品を協力して作り上げていく。普段なかなか身近に感じることができない公演の企画の話を聴いてから、私は街中を歩いていて目に入るひとつひとつの芸術作品、人工素材、製品を見て、「これらが立案、企画、製造、流通される中で、どのような人間模様があったのだろう」と思いを馳せずにはいられなくなった。京都コンサートホールの皆様、お忙しい中貴重な体験をさせてくださいまして、本当にありがとうございました。(村田)

初日のホール見学ツアーで大ホールは「天の川」をイメージにして作られていることを知り、その特徴を活かしたコンサートはどのような内容になるのかすごく関心を持っていた。そのため、インターンシップ終了後の 2 ヶ月後に、高野課長のご招待で、その特徴を活かした宇宙とパイプオルガンをテーマ

にした公演を見に行かせていただいた。非常に幻想的な空間でありながら、学芸員の解説がユーモアに富んでいて、シリーズ化して欲しいと強く感じた。

高野課長による自主事業の説明で、一つの企画を作るのに2年以上かかることを知り、とても驚いた。企画を考え、実行し、演者へのフィードバック、公演後のレポートや広報活動など、やるべきことが非常に多いと感じた。みなさんは日々様々なことを見て、それを企画に反映させようとしていると感じ、私も自分の知見を広げて、面白いことを発信できるような人になりたいと強く思うようになり、多様なことに関心を持ちたいと心がけようと思った。

コンサートホールの運営の一部に実際に参加させていただき、その中で、特に印象に残ったのはアウトリーチ活動である。子供向けの内容をどのように取り組んでいるのか、私は子供が苦手なので全然想像できなかったが、実際に福田さんのパフォーマンスを見て、子供たちと一緒に楽しむことができた。「様々な出会いを経て、大好きなものを見つけた時、その『好き』という気持ちを忘れずに続けて欲しい」という福田さんの言葉を受けて、すごく感動した自分がいた。このように、子供向けのコンテンツでも、大人が楽しめる内容だと実感した。(張)

3　美術史関係

3.0　美術史関係インターンシップ概要

人文学研究科教授　岡田裕成

令和５年度の美術史に関係するインターンシップは、東洋陶磁美術館に２名、京都国立近代美術館に１名、国立国際美術館に１名、Amame Associate Japan(株)に１名、合計５名の学生が参加した。これは日本東洋美術史研究室、および西洋美術史研究室所属の学部生・院生から希望する学生を派遣したものである。以下、東洋陶磁美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館のインターンシップについて報告する。

3.1　大阪市立東洋陶磁美術館 インターンシップ報告

文学部 4 年 宮﨑慎一郎

■研修先
大阪市立東洋陶磁美術館

■研修期間
令和 5 年 4 月 11 日～令和 6 年 3 月 5 日（32 日間）

■研修内容
・リニューアルオープン準備の補助
・展示作業の見学／補助（リニューアルオープン記念特別展「シン・東洋陶磁－MOCO コレクション」）
・広報業務の補助
・資料整理（スキャン作業、データ入力等）

大阪市立東洋陶磁美術館は、約 2 年の休館を経て、令和 6 年 4 月 12 日にリニューアルオープンした。報告者は、インターンシップとして基本的に週 1 日勤務し、休館中に行われていた様々な業務に関わることができた。

まず館では、リニューアルオープンに向けて、施設の整備や展覧会の準備などが行われていた。その中で、報告者は、リニューアルオープン記念特別展のタイトルやポスター、新たな美術館のロゴや館内表示のデザインを協議する場に立ち会うことができた。より多くの人々に親しんでもらうために様々な工夫をこらし、打ち合わせを何度も重ねて準備を進めている様子が非常に印象的であった。

リニューアルオープン記念特別展の展示作業では、学芸員の方と運送業者の方が、作品の安全を確保するためにどのような点に留意しているのか、実際の作業を見ながら学ぶことができた。また、作品を美しくかつ効果的に見せるために、作品同士の大きさや形、色などのバランスを考慮しながら配置していることや、作品の角度や位置などを微調整しながら展示していることを知り、展示に対する見方が大きく変わった。

広報活動においては、館が毎週更新している Instagram の投稿に携わった。館やコレクション、中之島の魅力をより多くの人々に伝えるために、作品を様々な視点で紹介したり、文章をわかりやすくしたりなど、試行錯誤しながら投稿内容を作成した。

約 1 年間、美術館の様々な業務に関わることができたインターンシップは、非常に楽しく新鮮な経験であったとともに、学芸員という仕事について理解を深め、自分の進路をじっくり考える良い機会となった。リニューアルオープンが迫った大変な時期に、このような貴重な経験の場を与えてくださった大阪市立東洋陶磁美術館の皆様に改めて御礼申し上げたい。

3.2　京都国立近代美術館　インターンシップ報告書

人文学研究科芸術学専攻博士前期課程 1 年 一宮文香

■研修先

京都国立近代美術館

■研修期間

令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 31 日

■内容

資料整理（蔵書整理、スキャン作業、データ入力等）

教育普及イベントの運営補助

美術館の SNS に掲載するコレクション展の作品紹介文執筆

インターンシップの中で印象に残っているのは、運営補助をさせていただいた二つの教育普及イベントである。

一つ目は、「びじゅつかんのお仕事たいけん！」というイベントで、小学 4 年生から中学生までを対象として、学芸員の仕事や美術館の裏側を紹介するものであった。学芸員、展示会場の看守スタッフ、警備、ショップ店員の仕事体験を通じ、美術館への理解を深めることを目的として、小学校高学年から中学生の参加者が、熱心に話を聞き、司会者に質問している様子が印象的だった。最後には自分の好きな作品を選んで展覧会のテーマを考えるというコーナーがあり、筆者も参加者と作品について話し、参加者の考えたさまざまなテーマについて話を聞いた。子どもたちが自由な発想で作品を見て考えていることがわかり、有意義な経験だった。

二つ目のイベントは、耳が聞こえない人と聞こえる人とが筆談で作品の意見交流を行う「筆談鑑賞会かく⇄みる⇄つながる」である。このイベントは、事前の会議から参加させていただき、どんな参加者でも「筆談鑑賞会」を楽しむことができるよう、視覚的に情報を伝える方法などを議論した。当日の筆談鑑賞会では、静かな会場で筆談するペンの音だけが響く独特の雰囲気が印象的だった。筆者も事前に筆談鑑賞を体験したが、絵画の視覚的な情報をさまざまに言語化することで、初対面の人とも深い考察を共有し、さまざまな観点から作品を考えることができ、非常に楽しい体験だった。

上記のイベントの運営補助を通じ、展覧会以外にも、さまざまな年齢、属性の人に美術を楽しんでもらうためのさまざまな取り組みがなされていることを知った。1 年間の美術館インターンシップで、美術館の取り組みや学芸員の仕事内容について、理解を深めることができた。

3.3　国立国際美術館インターンシップ報告

人文学研究科博士前期課程 2 年　平阪由貴

■研修先
国立国際美術館

■研修期間
令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 31 日

■事前研修
なし

報告者は 1 年間、国立国際美術館でキュレトリアルインターンシップ（学芸）に参加した。応募時の動機は「美術館の業務を実見し、自身のキャリア形成に生かしたい」というものである。結果、美術館はもちろん、作品や作家、ギャラリーなど美術業界全般に関しての見識を広めることができ、自身の研究やキャリアを考えるにあたって非常に有意義な体験であった。

以下、インターンに関する具体的な内容を記す。出勤は基本的に平日週 2 回程度、11～17 時（1 時間の休憩を含む）である。そのほかイベント等がある際は土日にも出勤することがあった。基本的な業務内容としては、展覧会や収蔵品に関するデータの整理、展覧会記録(スクラップ)の作成、作品・作家情報の収集、情報資料の整理、展示室の清掃等が挙げられる。これらの業務は学芸課研究補佐員によって指示される。十分な説明があったため問題なく業務を遂行できた。通常業務とは別に展覧会の展示・撤収作業の見学の機会もあった。特に同館は現代美術を扱っており、展示中に作家とやり取りをすることも多々ある。その様子を見学できたことは貴重な経験であった。展示作業の見学が行われる前には作品管理を担当するレジストラーによるレクチャーを受けた。展示室や収蔵庫内で作品を前にした際の注意点を学んだことで緊張感を持ちながらも張り詰めすぎることなく見学することができた。同館は専任のレジストラーを有しており、専門性の高い仕事を間近で見ることができたことも大きな収穫である。

応募動機であった「美術館の業務を実見し」たいという点は 1 年間のインターン期間を経て十分に満たされた。キャリア形成に活かせるか否かはまだ判断できることではないが、応募時よりも明確に自身のキャリアを考えられるようになったことは確かである。更には専門外であった現代美術への興味と知識を得ることができ、作品との距離が縮まったことで、美術に対する視野が広くなった。全体を通して本インターンシップは実りの多い体験となった。